

ラットの肺

東京大学医科学研究所獣医学研究部出題 第23回獣医病理学研修会標本No.389



動物：Wisterラット，18ヵ月齢，雌。コンベンショナル状態で飼育された4週齢ラットを購入後，清浄環境下で2ヵ月間飼育，毎週1回コーチゾン（25mg）を皮下注射した。この間塩酸テトラサイクリン（1g/1ℓ）を飲水投与したが購入後約16ヵ月から消瘦が目立ち，第4乳腺部に大豆大腫瘤を認め，購入17ヵ月後に剖検された。

肉眼所見：肺は全葉にわたり退縮不全，乳腺部腫瘤のほかは主要臓器に変化を認めなかった。

病理組織学的所見：病理組織学的に変化のみられたのは肺のみで，退縮不全を示した肺の大部分において，肺胞中隔は肥厚し，単核球を主体とした細胞浸潤を認め，気管枝周囲にもリンパ球を主体とした細胞浸潤がみられた。肺胞内面にはH E染色で弱好酸性の泡沫状物質の付着がみられ，ヘマトキシリン好性の微小顆粒を含み（写真1，A，×250），附近にはいわゆる泡沫細胞化したマクロファ

ージが散見された（写真1，B）。泡沫状物質はPAS陽性，その一部はGrocott染色で黒色を示す円型の粒子として認められた。肺塗抹標本のトリイジンプルーO染色により粒子は赤紫色に染色され，ギムザ染色により内部に最大8個の小体が認められ（写真1，挿入，×1,500），*Pneumocystis carinii*のシストと考えられた。また*P. carinii*のシストおよびトロホゾイトは電顕によっても確認された（写真2，bar=1μm）。したがって肺胞腔内にみられた泡沫状物質も*P. carinii*のトロホゾイトおよびシストであると考えられた。*P. carinii*の潜在感染は，免疫不全あるいは免疫抑制状態の宿主において顕性化して重い肺炎を起こすことが知られているが，本例は老齢および乳腺腫瘍が肺炎の誘引となったものと考えられる。

病理組織学的診断：*P. carinii*による間質性肺炎。